Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

府中市
ヤングケアラー実態調査報告書
ー概要版ー

令和6年3月

府中市ヤングケアラープロジェクト
一般社団法人ケアラーワークス ・ 府中市

目次

Ⅰ.児童生徒調査

1. 調査概要 ― 1
2. ヤングケアラーと思われる子どもの人数（推定） ― 2
3. 家庭・家族のことについて
 3-1. 世話をしている家族の有無 ― 3
 3-2. ヤングケアラーの自己認識 ― 4
 3-3. 世話を必要とする家族と状態 ― 5
 3-4. 世話の内容 ― 6
 3-5. 世話をしている頻度と時間 ― 7
 3-6. 世話をしているためにやりたいけれどできないこと ― 8
 3-7. 世話で感じるつらさ・ストレス ― 9
 3-8. 世話について相談した経験の有無、相談しない理由 ―10
 3-9. 学校や周りの大人にしてもらいたいこと ―11
4. ヤングケアラーの認知度と認知経路 ―12
5.自由回答 ―13

Ⅱ.教員・関係機関調査

1. 調査概要
2. ヤングケアラーについて ― 16
 2-1.ヤングケアラーの認知度と関わりの有無 ― 17
 2-2.子どもがケアをしている相手とその状況 ― 18
 2-3.ヤングケアラーと思われる子どもの生活への影響 ― 19
 2-4.ヤングケアラーと思われる子どもへの対応と体制について ― 20

Ⅲ.考察・まとめ

1.子どもたちが安心して過ごせる環境づくりに向けて ― 21
2. まとめ ― 22

1. 調査概要

目　的　学校や家庭生活の中での悩みや困りごとなどの生活実態を明らかにし、ヤングケアラーの実態や支援施策等の検討を行うための基礎資料とするため

対象者　計17,401名　小学生（5･6年生のみ）4,437名、中学生 6,012名、高校生世代 6,952名

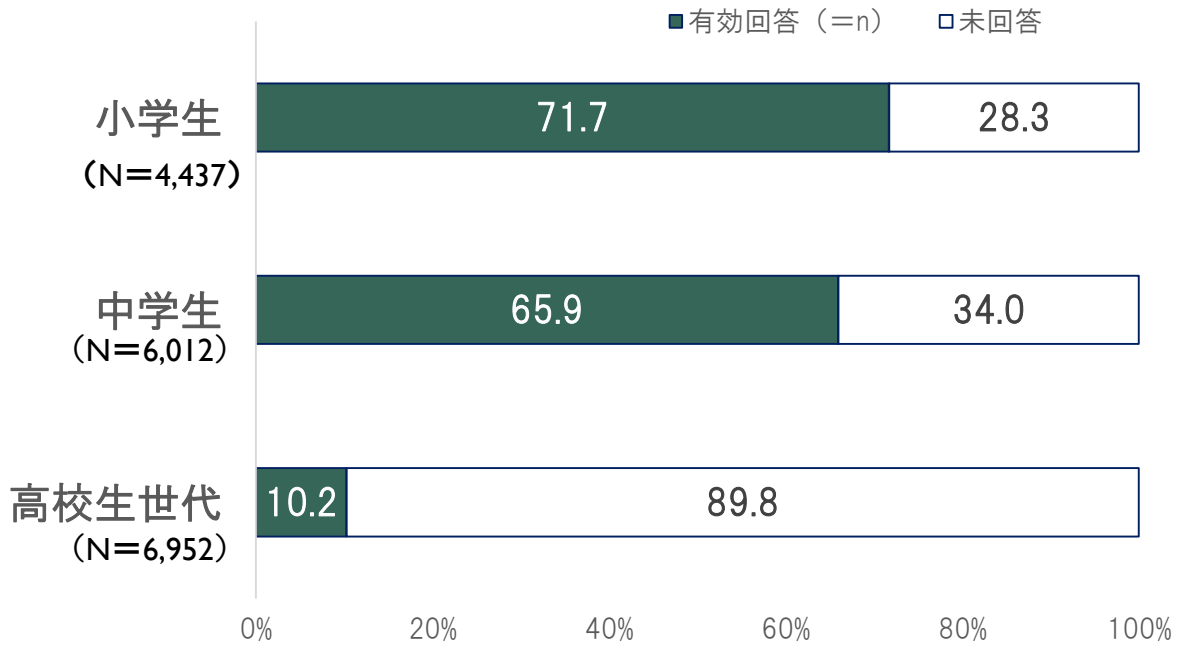
調査方法　web調査　小中学生：学校配布タブレットから回答
高校生世代：依頼状郵送、個人の端末から回答

調査実施期間

2023年7月18日～9月1日（小中学生）
2023年8月23日～9月30日（高校生世代）

有効回答数（回答率）

小学生　3,180名（71.7%）
中学生　3,962名（65.9%）
高校生世代　712名（10.2%）



2. ヤングケアラーと思われる子どもの人数（推定）

今回の調査結果を活用して府中市独自にヤングケアラーと思われる子どもの人数を推定した。
下記の条件設定に基づくと「ヤングケアラーと思われる子ども」は小学5年生～高校3年生の児童生徒全体の5.4%（約426人）、その中で家族の世話により「何らかの影響が出ていて、支援が急がれる子ども」は1.7%（約131人）と推定される。

ヤングケアラー定義（厚労省ホームページ）	児童生徒 全体（小学5年生～高校3年生） <調査結果を用いた条件設定>	100.0%（7,825人）
本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを	世話をしている家族が「いる」不定期のもの、比較的軽微なお手伝いの範疇のもの等を含む	世話をしている家族が「いる」子ども 10.3%（約809人）
日常的に行っている子どものことで	家族の世話を ・「週3日以上」行っている、又は、 ・「週2日以下」だが1日あたり3時間以上行っている	ヤングケアラーと思われる子ども 5.4%（約426人）
責任や負担の重さにより、学業や友人関係などに影響が出てしまうことがある	世話をしているためにやりたいけどできないことがある（1つ以上に該当）	うち、 何らかの影響が出ていて、支援が急がれる子ども 1.7%（約131人）

※1.上記の条件設定はあくまで調査結果に基づく推定による設定であり、支援の対象を限定するものではありません。
※2.推定数算出においては端数処理等を行っているため、児童生徒全体の人数に割合（%）を乗じた数値とは一致しません。
※3.今回の調査対象は小学5年生～高校3年生であったため、上記の推定数も小学5年生～高校3年生の児童生徒に関する推定数となっています。

3. 家庭・家族のことについて

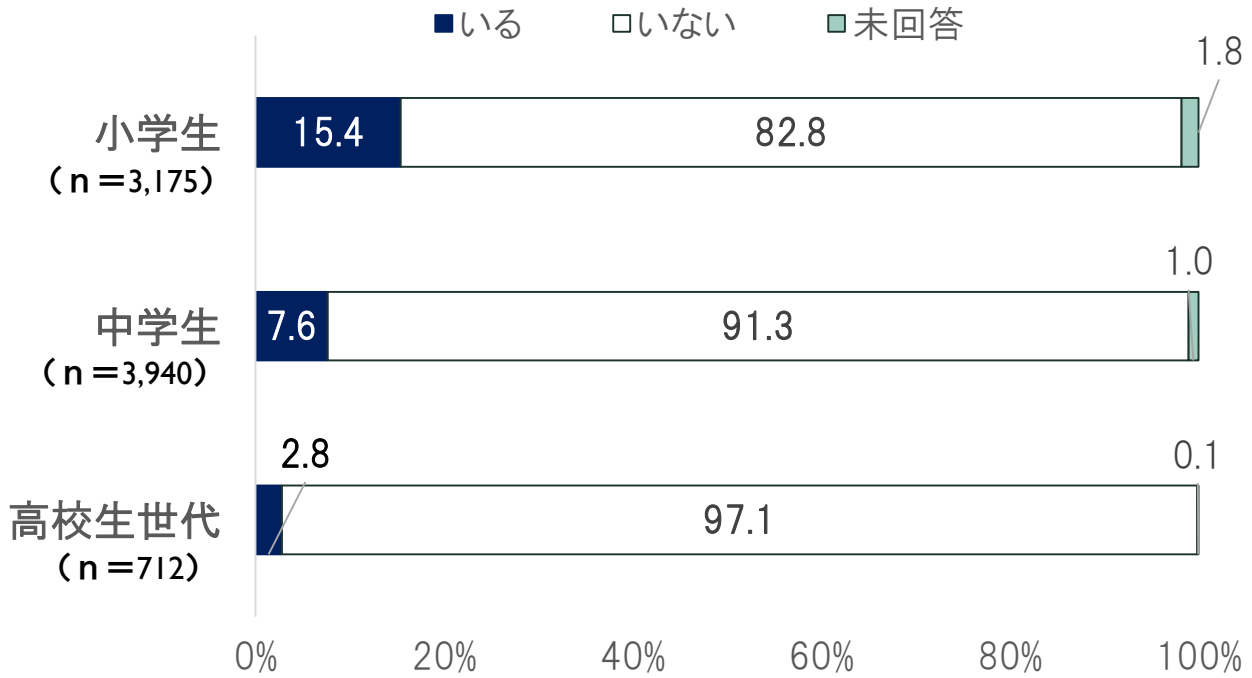
3-1. 世話をしている家族の有無

・『世話をしている家族が「いる」』と回答した児童生徒は、小学生488人（15.4%、約6人に1人）、中学生301人（7.6%、約13人に1人）、高校生20人（2.8%、約35人に1人）となった。

・小学生、中学生において全国調査結果と比較して割合が高い。

※全国調査では、小学6年生が6.5%（約15人に1人）、中学2年生が5.7%（約17人に1人）、全日制高校2年生が4.1%（約24人に1人）と回答。

家族の中にあなたがお世話をしている人はいますか



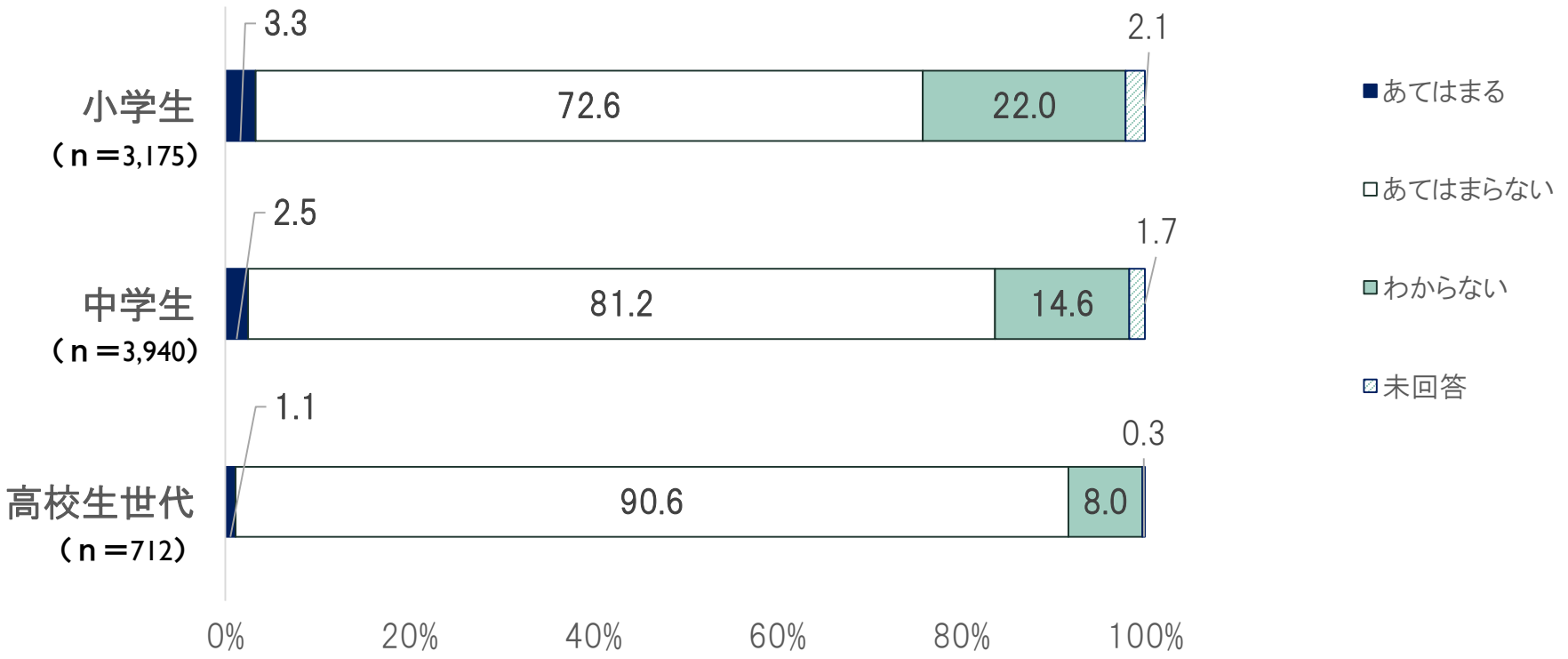
3. 家庭・家族のことについて

3-2. ヤングケアラーの自己認識

・ヤングケアラーのイラストや説明を見せた後に、自身がヤングケアラーにあてはまるかどうか聞くと、小学生は3.3%、中学生は2.5%が「あてはまる」と答えた。また、「家族のお世話をしている」と答えた児童生徒に比べて非常に少ない。

・年齢が低いほど、お手伝いとケア役割の判別は難しく、自身がケアをしている認識は持ちにくいことが推測される。

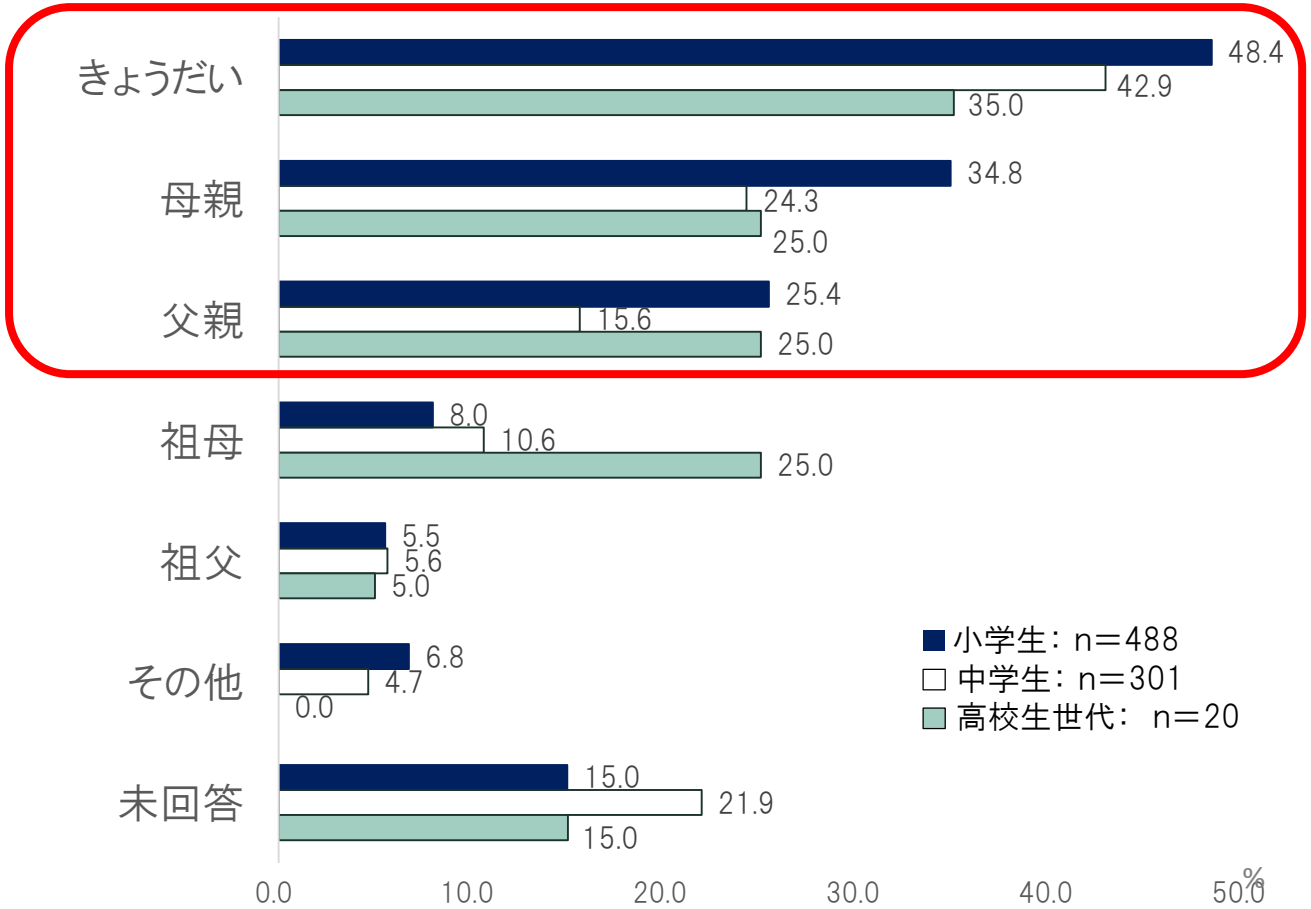
あなた自身はヤングケアラーにあてはまると思いますか



3. 家庭・家族のことについて

3-3. 世話を必要とする家族と状態

・世話をしている対象は「きょうだい」が3割～5割、「母親」が2割～3割、「父親」が2割前後となっている。
・世話をしている家族の状態としては、家族の属性ごとに異なっていた。

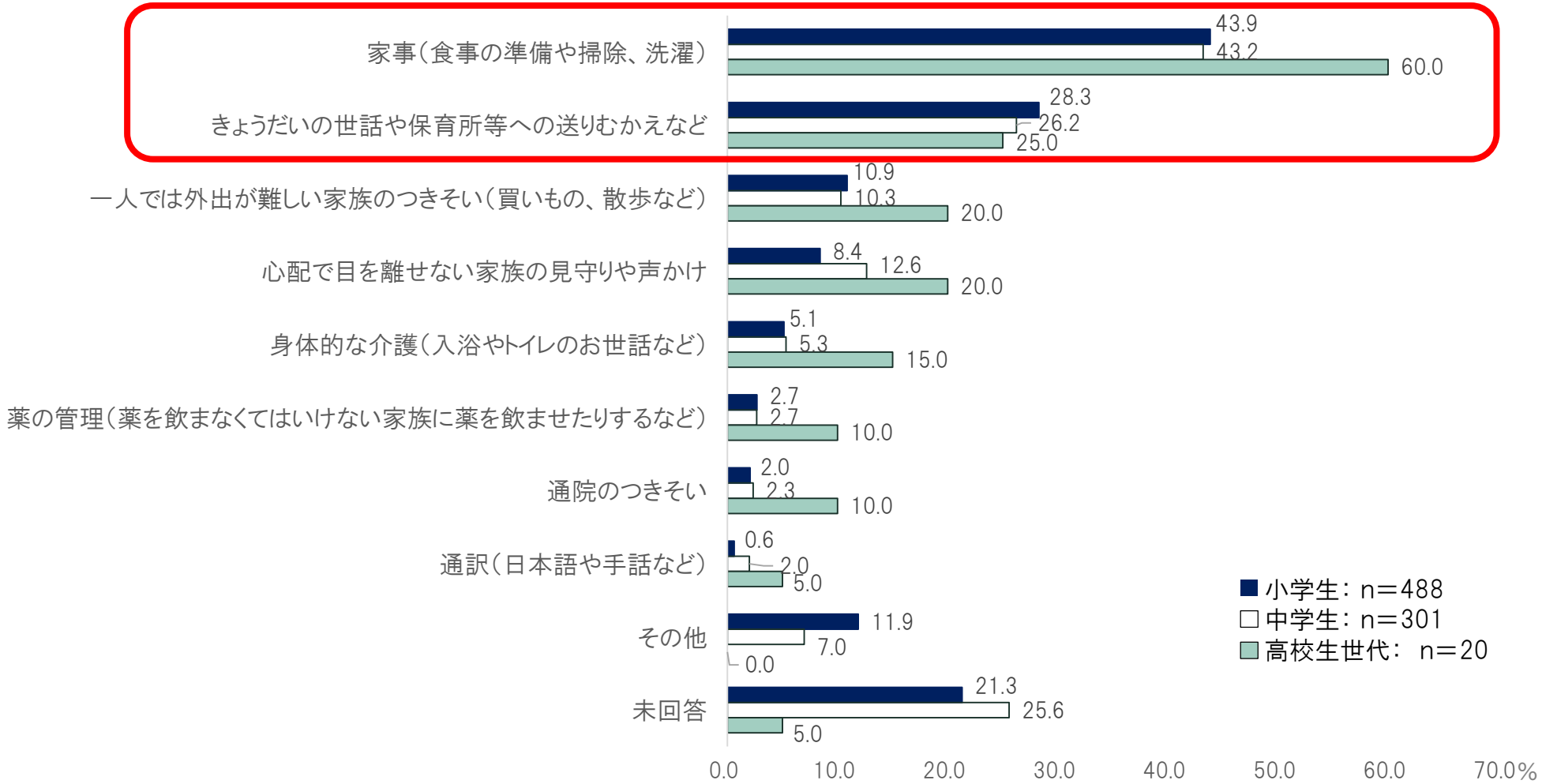


きょうだい	幼い・知的障がい 等
母親・父親	わからない・身体障がい 病気・精神疾患 日本が苦手 等
祖父・祖母	高齢・要介護 身体障がい・認知症 等

3. 家庭・家族のことについて

3-4. 世話の内容

・世話の内容では、「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」が4～6割、次いで「きょうだいの世話や保育所等への送り迎えなど」が約2～3割、「一人では外出が難しい家族の付き添い」と続く。



3. 家庭・家族のことについて

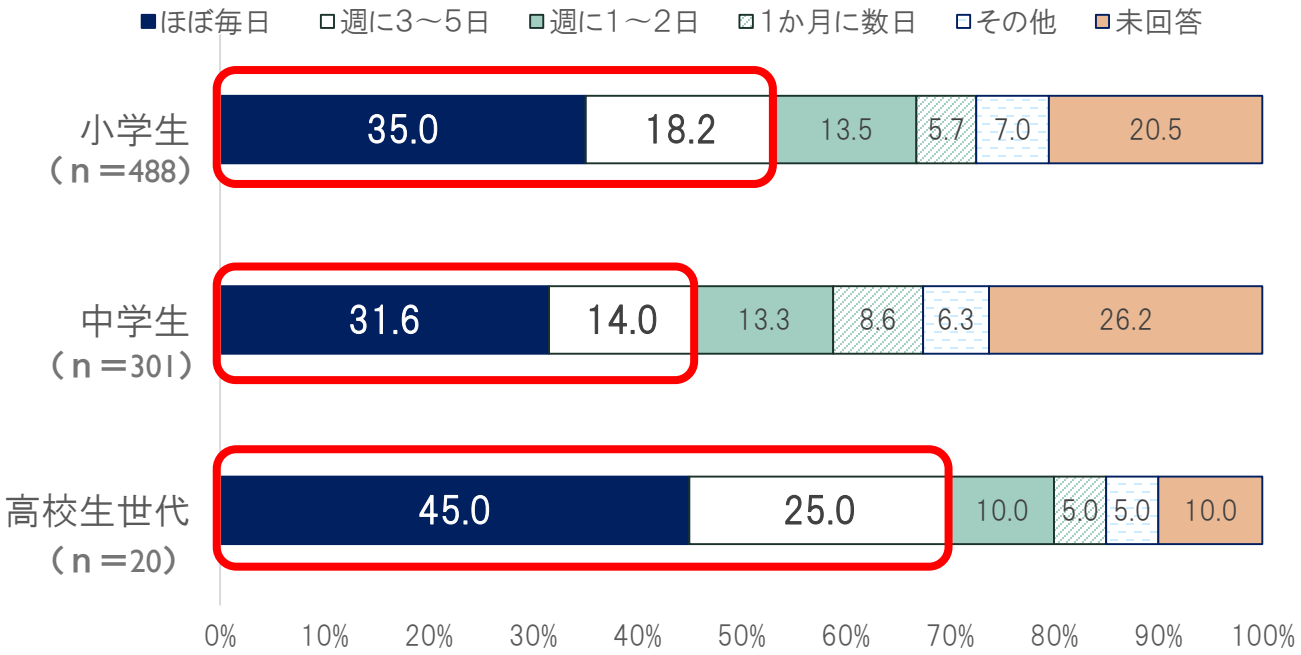
3-5. 世話をしている頻度と時間

世話をしている平均時間

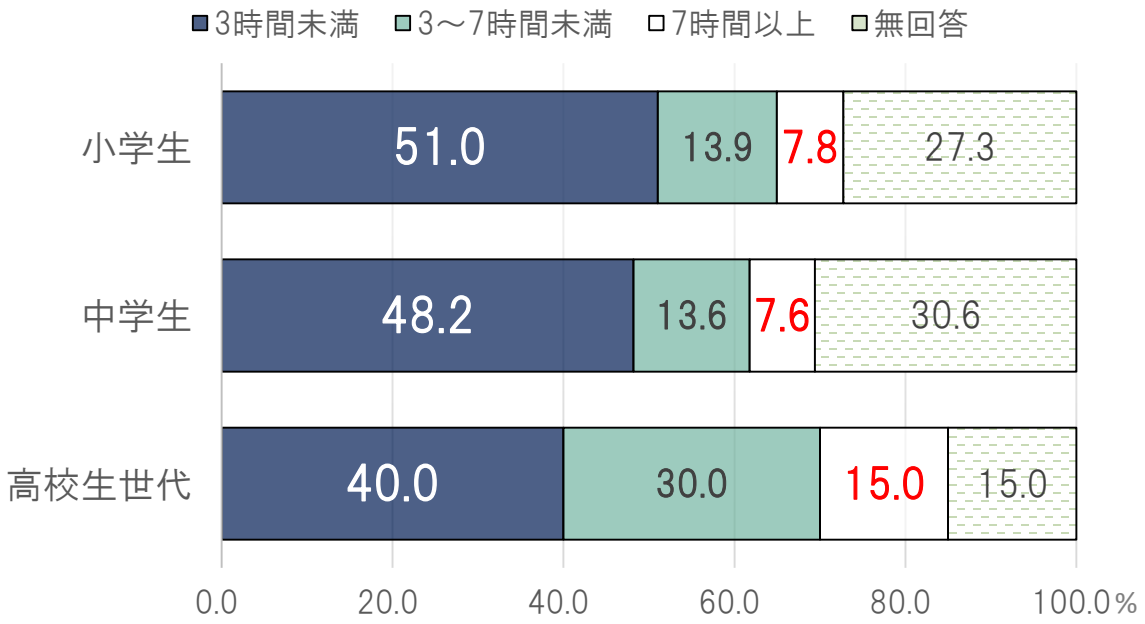
	平日	休日
小学生	3.4 時間	3.9 時間
中学生	3.5 時間	4.3 時間
高校生世代	4.4 時間	4.8 時間

・世話をしている児童生徒の4～7割が「週3日以上」家族の世話をしており、
　平均時間を見ると、平日では約3～4時間、休日では約4～5時間となっている。
・児童生徒全体で、7時間以上と回答した人も約1割程いることがわかった。
・週に1～2日の頻度であったとしても、かける時間が3時間以上となれば負担感も増すことが推測される。

世話をしている頻度

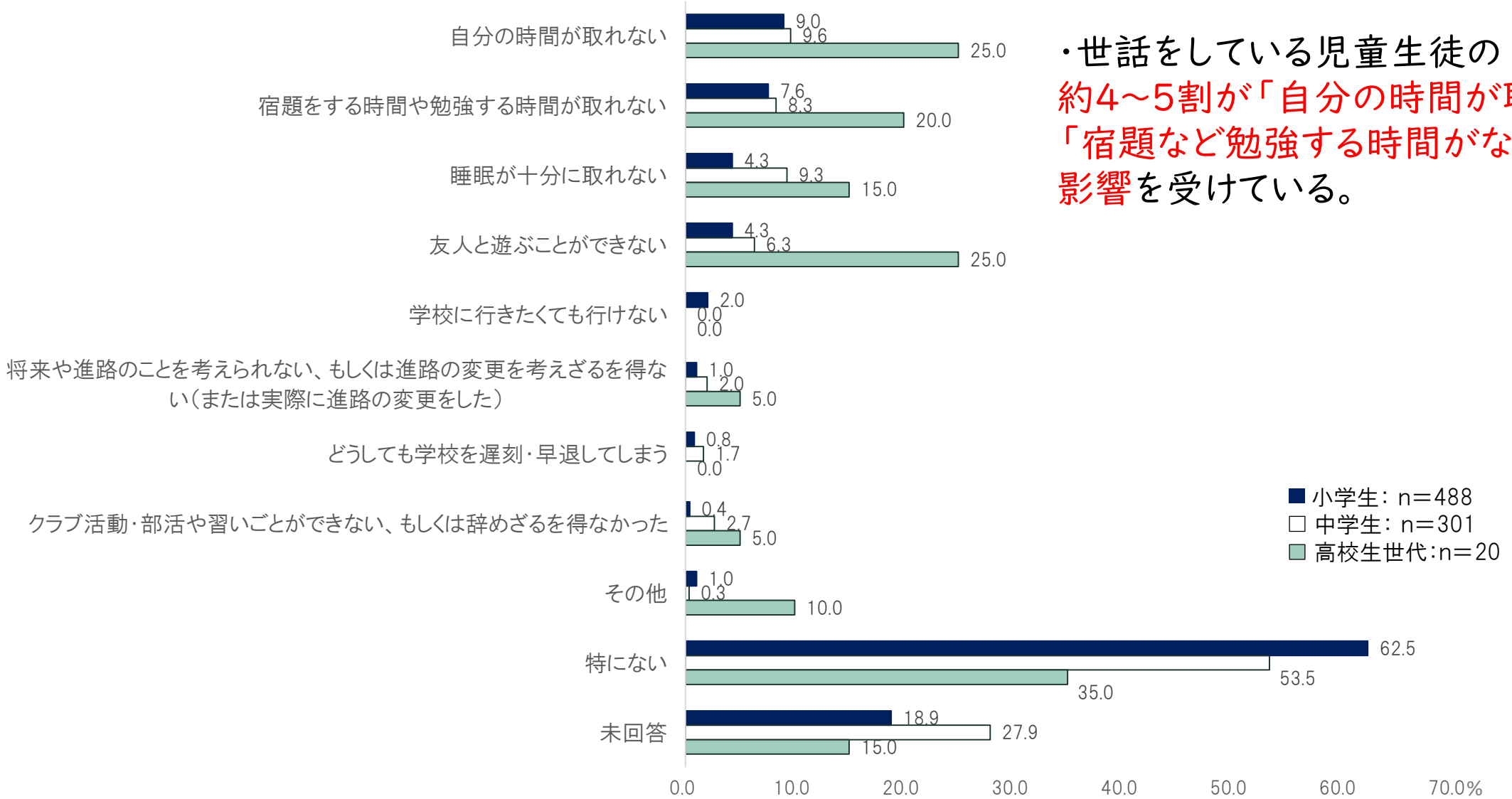


平日　ケアにかける時間数



3. 家庭・家族のことについて

3-6.世話をしているためにやりたいけれどできないこと

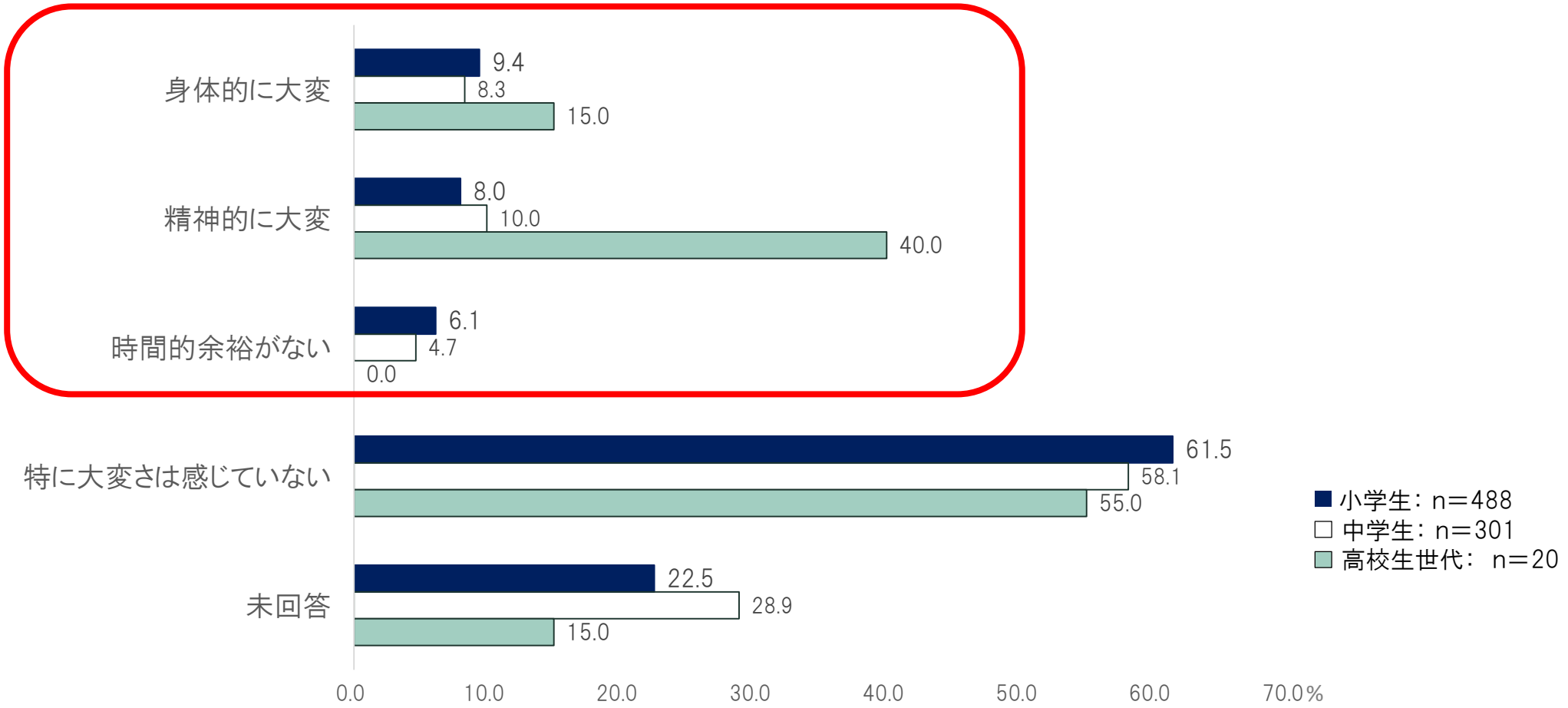


・世話をしている児童生徒の
約4～5割が「自分の時間が取れない」「宿題など勉強する時間がない」など影響を受けている。

3. 家庭・家族のことについて

3-7. 世話で感じるつらさ・ストレス

・世話をしている小学生と中学生の約10人に1人、高校生世代の約3人に1人が、世話の大変さを感じている。児童生徒全体で「精神的に大変」、「身体的に大変」、「時間的余裕がない」の順となっている。

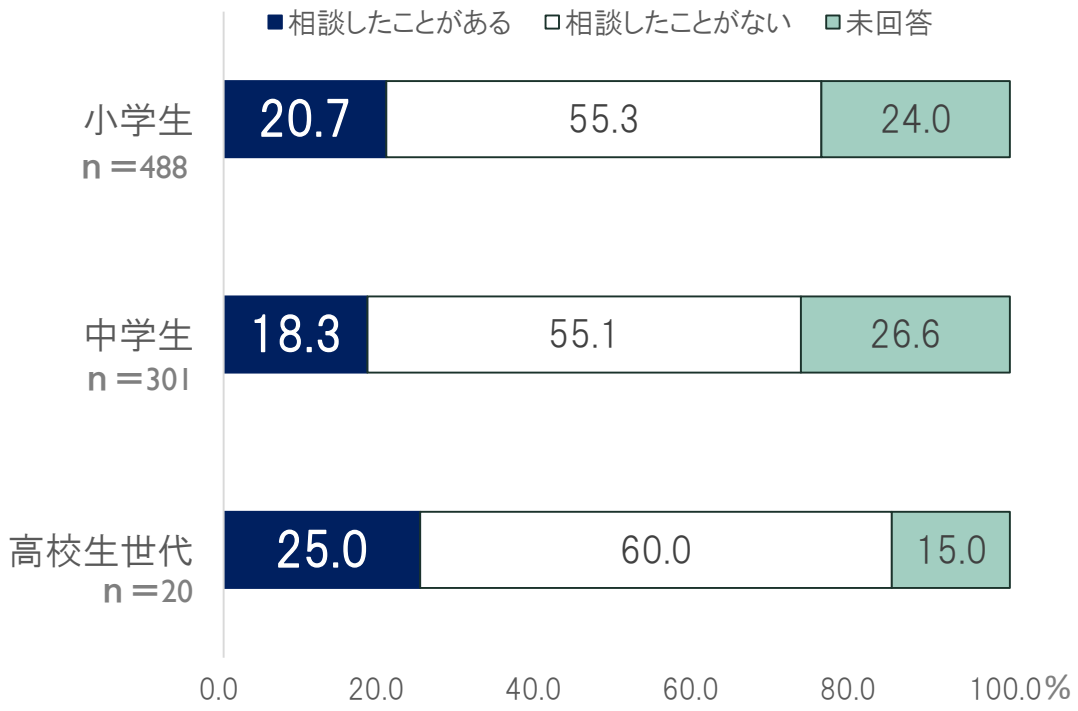


3. 家庭・家族のことについて

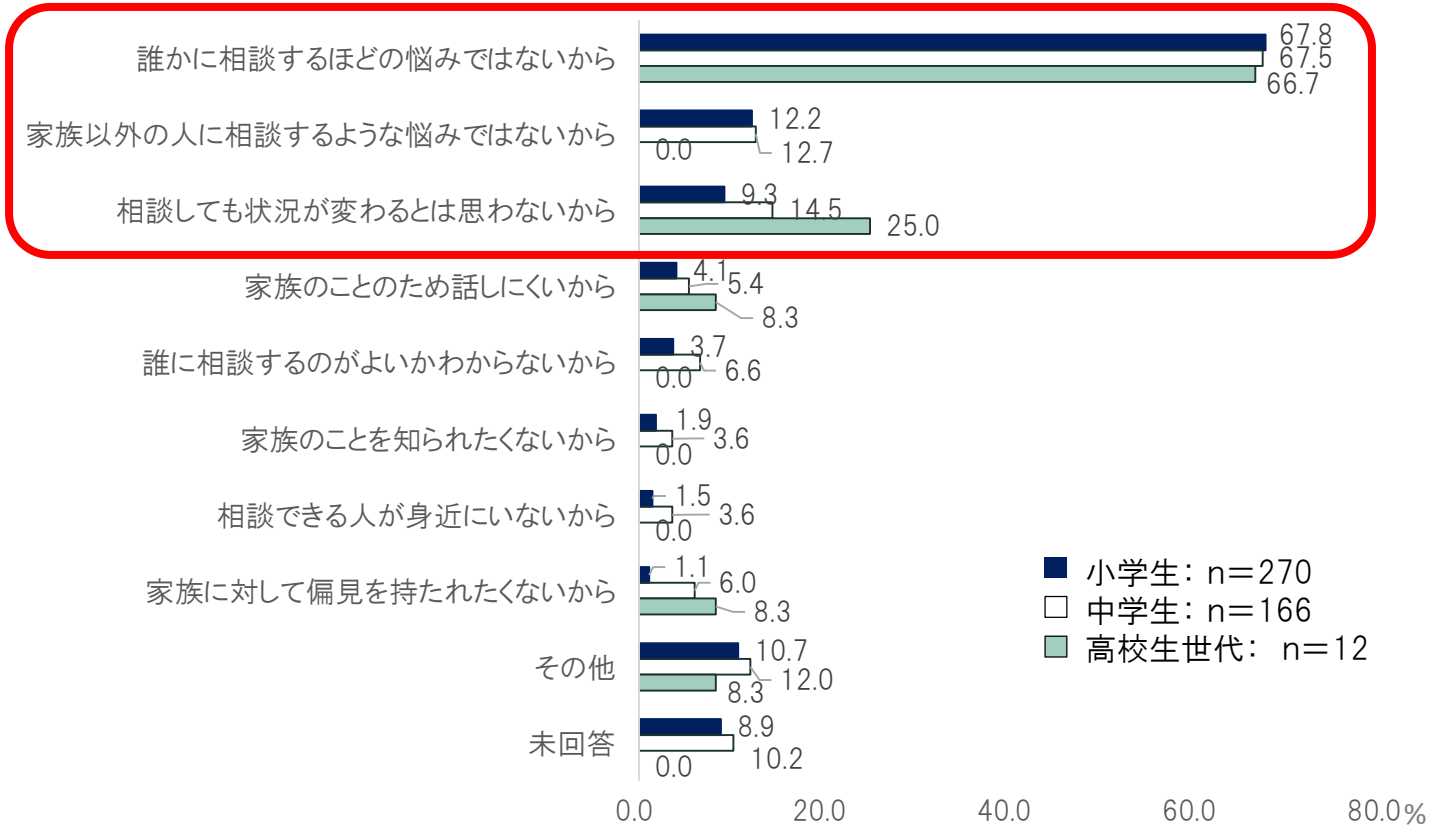
3-8.世話について相談した経験の有無、相談しない理由

・小学生および中学生の約5割、高校生世代の約6割が相談したことが「ない」と回答している。
・相談しない理由としては、「誰かに相談するほどの悩みではないから」という回答が最も多い。また、「相談しても状況が変わるとは思わないから」といった回答も見られる。

相談経験の有無



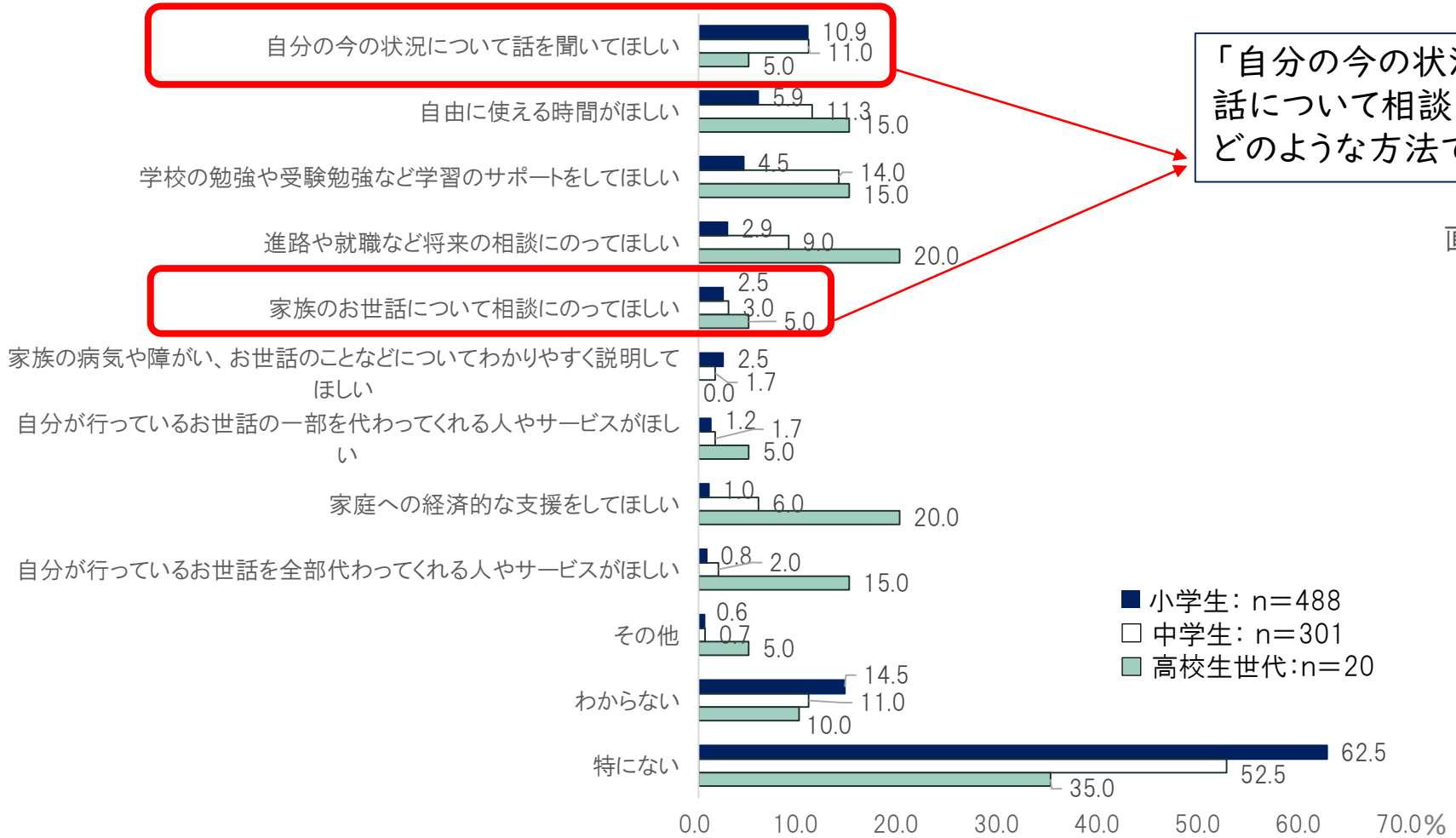
相談しない理由



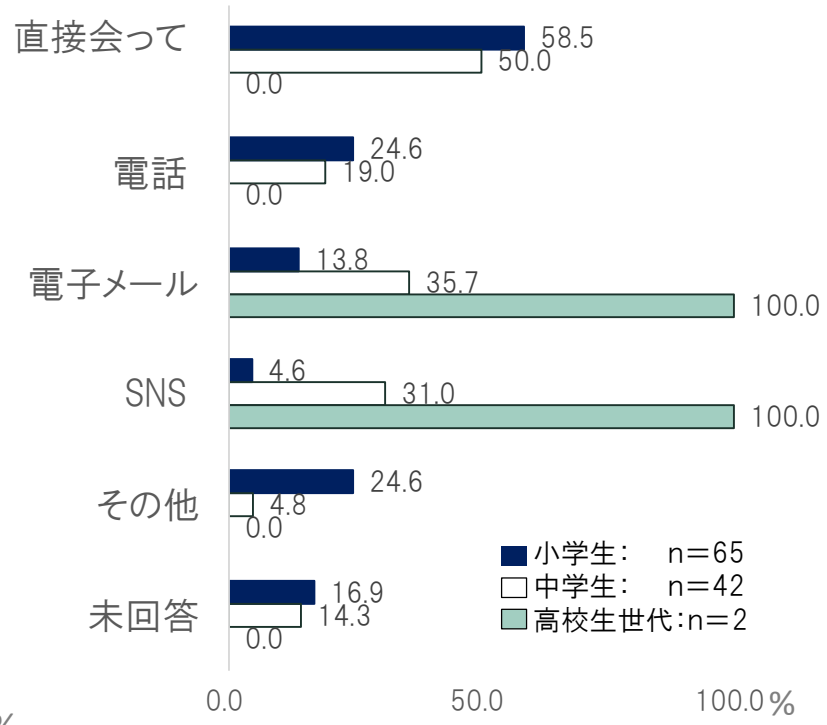
3. 家庭・家族のことについて

3-9.学校や周りの大人にしてもらいたいこと

・世話をしている児童生徒の約2～5割が周囲の大人に対して、「自分の今の状況について話を聞いてほしい」「自由に使える時間がほしい」「学習のサポート」「将来の相談にのってほしい」と回答している。



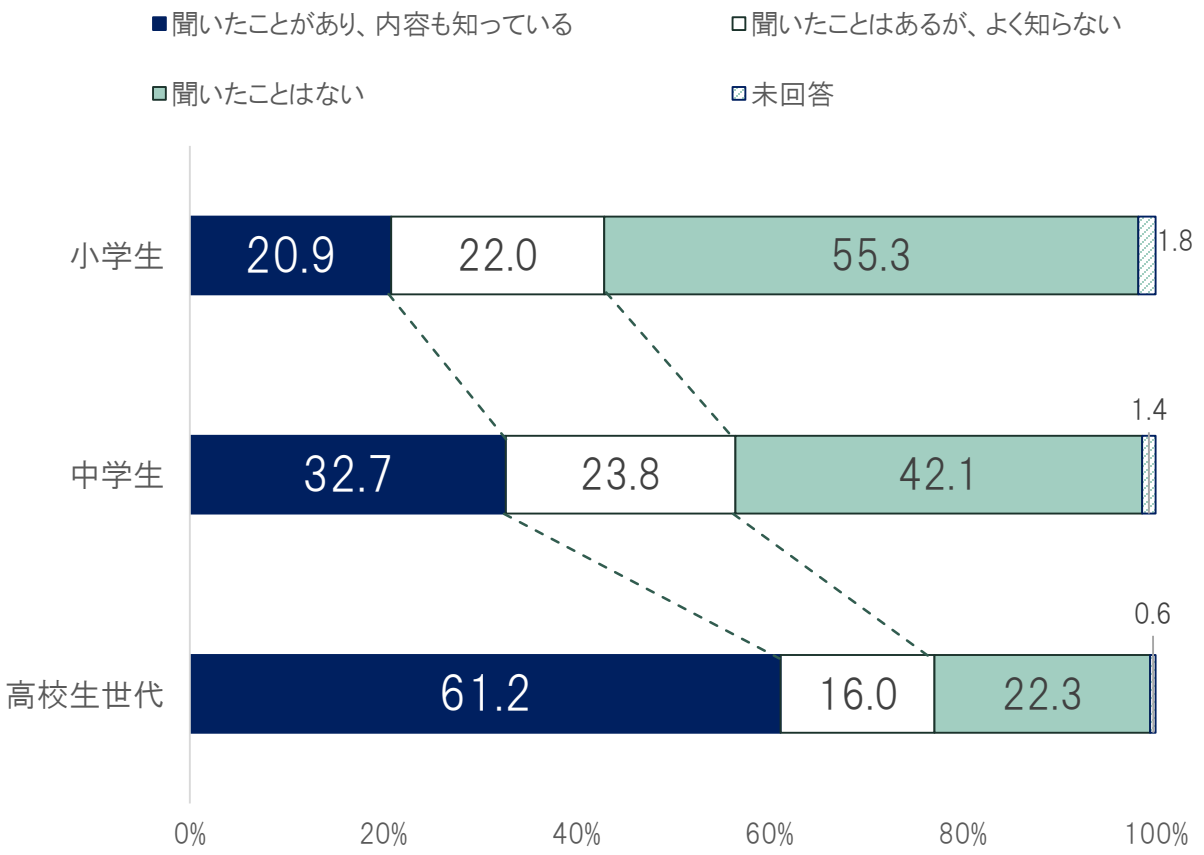
「自分の今の状況について話を聞いてほしい」「家族のお世話について相談にのってほしい」と回答した方にお聞きします。どのような方法で話や相談をしたいですか。（複数回答）



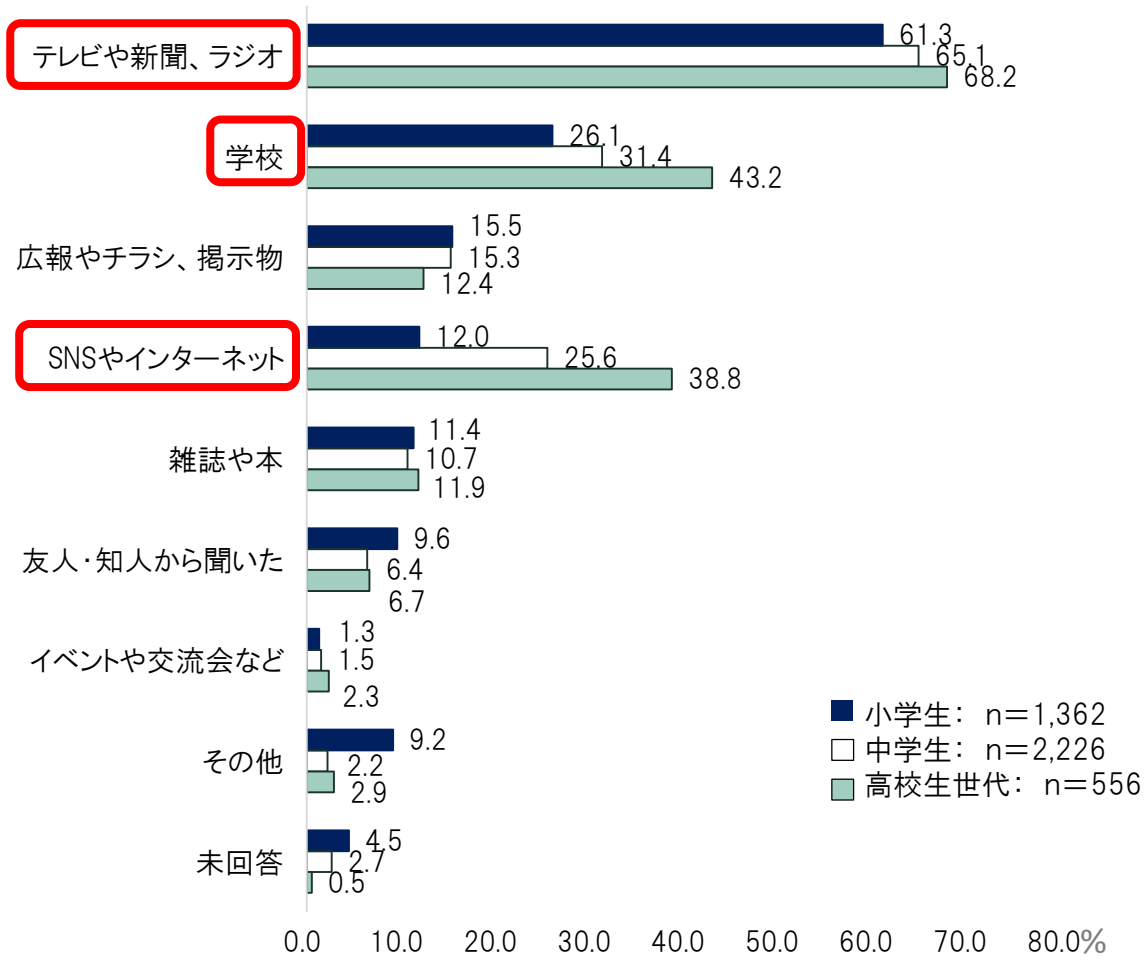
4. ヤングケアラーの認知度と認知経路

・ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容も知っている」児童生徒は、約2～6割程度となっている。

ヤングケアラーという言葉をこれまで聞いたことがありますか。



ヤングケアラーという言葉をどこで知りましたか。（複数回答）



5. 自由記述（3,727人の声から抜粋）

1）アンケートに回答して感じたこと

・小学6年生
このアンケートで自分を振り返ることができた。

・小学6年生
このようなアンケートを定期的に行ってほしい。回答する際に、いつでも私の思いを聞いて、寄り添ってくれる人たちがいると感じることができました。

・小学5年生（お世話している家族がいる）
ヤングケアラーを助けられる人たちが必要だと思う。

・高校2年生
私は家事を手伝ったりはしているけれど、自分の自由が無くなる状況ではないです。家庭内の問題と考えてあまり外部に助けを求めたりしにくく、逆に外部が簡単に口を出せるような問題でも無いと感じ、難しい問題だと思っていました。そのため、学校やこういったアンケートで本人たちの要求や困りごとを聞き、対策を練るのが大事なのかなと思いました。

2）周知啓発について

・小学6年生
支援を広げるためには、SNSやメールなどもあるが小学生は SNSやメールを使えない人もいるから、学校の PC からも相談ができるようなサービスを作ってほしいと思う。

・小学6年生
ポスターやチラシなど人目のつきやすいものを作って、みんなにヤングケアラーについて知ってもらう。

・中学1年生
障害者に対する理解をしてくれるような活動をしたほうがいいと思う。

・中学3年生
学校でヤングケアラーについての授業を行う。

・高校3年生
まずその現状を知ってもらうこと、認知が大切なのではないか。学校での講演会を始めそういった方々が身近にいることを知ってもらいそこから支援等へと発展すべきだと感じた。

5. 自由記述（3,727人の声から抜粋）

3）相談について

・小学6年生
スクールカウンセラーが来る日を増やしてほしい。

・小学6年生
学校でいつでも気楽に相談できる場所がほしいです。行きたくないなとか言いづらい環境にならないようにしてほしいです。

・中学2年生
家族を不安にさせてしまうと思うと窓口は僕ら少年には難しい。行きにくい。だから学校でスクールカウンセラーのような機会を与えてもらえると行きやすいです。

・中学3年生
学校の先生たちに相談したくても、先生が忙しくてとても話しかけられる状況ではないから、相談できていない。

・中学3年生
子どもが話しやすい相談支援体制を支援者団体とつくる自治体を支援。スクールソーシャルワーカーの配置支援や民間学習支援事業と学校の連携を促進など

・中学3年生（障害のあるきょうだいをお世話）
SNSは親に内容をよく監視されるから怒られるかも。だから相談しづらい。

・中学3年生
ヤングケアラーは必然的に一人で行動することが多くなり、精神的にもダメージがあると思うので、本人が話したいと思うときに自然に話せる場所が必要だと思った。

・高校3年生
もっと学校側に話しやすい環境をつくる。ヤングケアラーの子供たちは自分から悩みを話すことが難しいため、学校で日頃から子供とのコミュニケーションを大事にしたり、悩んでいることをいつでも相談できる環境を常に整えておくことが大切だと思う。

・高校3年生
カウンセラーや自治体に相談しても結局現状は変わらないと思うと、相談する気も失せてしまう人が多いと思う。相談したら、ただ同情するだけでなく確実にその子の状況を物理的に改善することを示すことで、ヤングケアラーの声がもっと届くようになり、国や自治体への信頼感も変わってくると思う。

5. 自由記述（3,727人の声から抜粋）

4）市の施策要望

・小学5年生
一時不登校だった経験から、悩みを吐き出して、相談できるようなアプリを作ってほしい。

・小学6年生
金銭的な援助や市の職員の方が定期的に訪問するなど必要だと思う。

・中学3年生
ヤングケアラーといってもいろいろ種類があるので、一括りにするのではなく、一人ひとりに合った支援をしていくことが大切だと思います。

・中学3年生
福祉、介護、医療、教育などの現場でヤングケアラーに関する研修などを推進する。

・高校3年生
お金を支給するだけでは解決しない問題に対して、府中市がどのように対応していくのかとても気になります。

・高校2年生
ヤングケアラーについて高校の授業で初めて知ったため、中学や小学校の授業など、早い段階で知ることができたらよかった。

・高校3年生
経済的支援。介護を理由に学業や部活ができない人もいるから、家事代行サービス等を市として派遣する。

・高校2年生
悩んでいる人の相談窓口を増やしたり、支援につながるように、大人にも情報を提供してほしい。

・高校1年生
子どもを支援してくれる場所がどこにあるか把握できなくて、初めて行くまでのハードルが高いようなイメージがある。子どもへの支援をまとめた子どもにとってわかりやすい専用ホームページや、気軽に遊びに行ける場所(どんな話でも聞いてもらえるような場所)などをまとめたマップがあるとハードルは下がるかと思います。

1. 調査概要

目　的　家事や家族の世話などを日常的に行っている子どもへの気づきや対応について、その状況や認識、学校や家庭、地域などで行っている対応や市への要望について明らかにし、支援施策等の検討を行うため

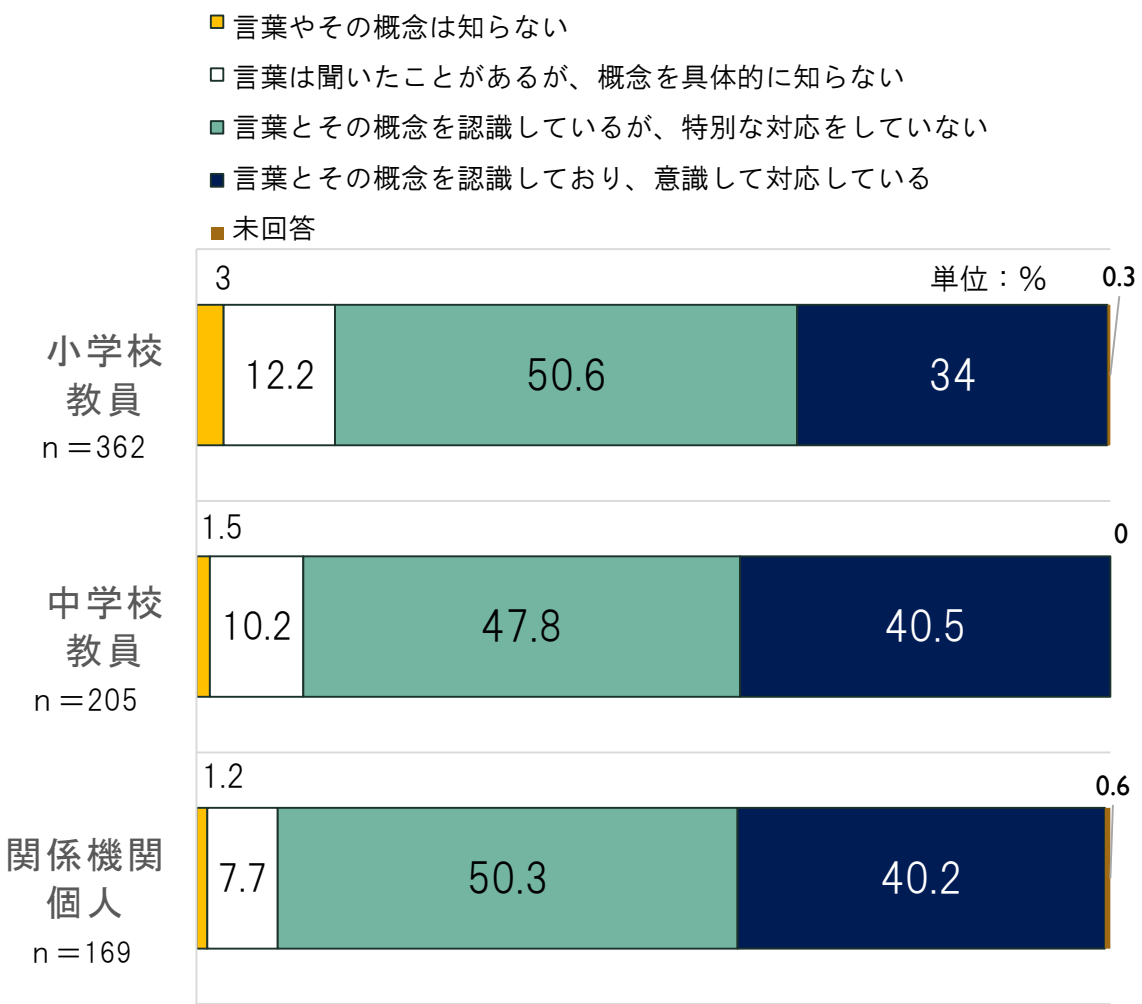
調査方法　web調査　依頼状を送付し、個人の端末から回答

対象者	公立小学校22校 公立中学校11校 全教員	行政、介護、福祉、医療等の関係機関		子ども・若者支援団体
		機関・事業所	個人	
対象者（=N）	1,024	727	677	19
回答数（=n）	574	179	169	5
回答率	56.1%	24.6%	25.0%	26.3%
実施期間	2023年8月21日～10月16日	2023年9月25日～10月22日		2023年10月16日～11月30日

2. ヤングケアラーについて

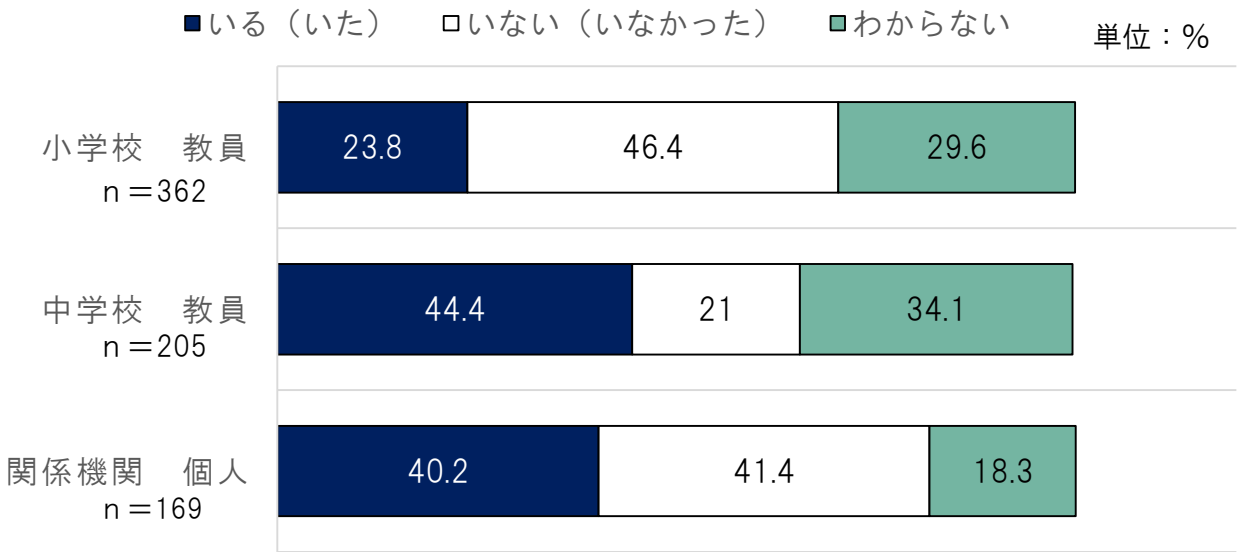
2-1. ヤングケアラーの認知度と関わりの有無

言葉や概念の認知度



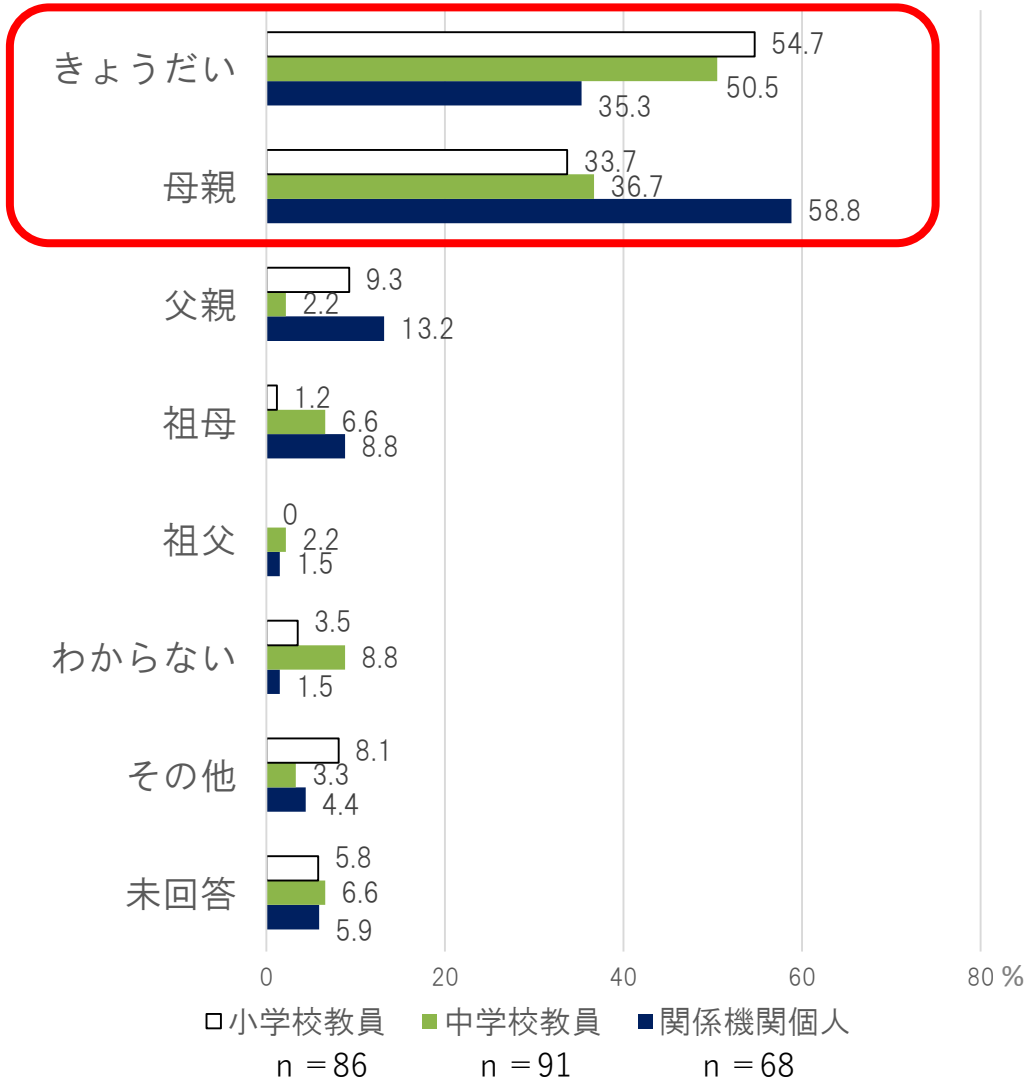
・ヤングケアラーの概念について、教員も関係機関の専門職も約1割の人が「知らない」状況であった。
・概念を認識し、対応をしている人は、約3人に1人であった。
・これまでヤングケアラーと思われる児童生徒と関わった経験があるのは、「中学校教員」、「関係機関個人」が約4割、「小学校教員」が約2割であった。

これまでかかわった児童生徒のうち
ヤングケアラーと思われる子どもの有無



2. ヤングケアラーについて

2-2. 子どもがケアをしている相手とその状況



・小学校86名・中学校91名の教員が把握しているケアの相手は、「きょうだい」「母親」の順で、関係機関個人の68名は、「母親」「きょうだい」の順となった。

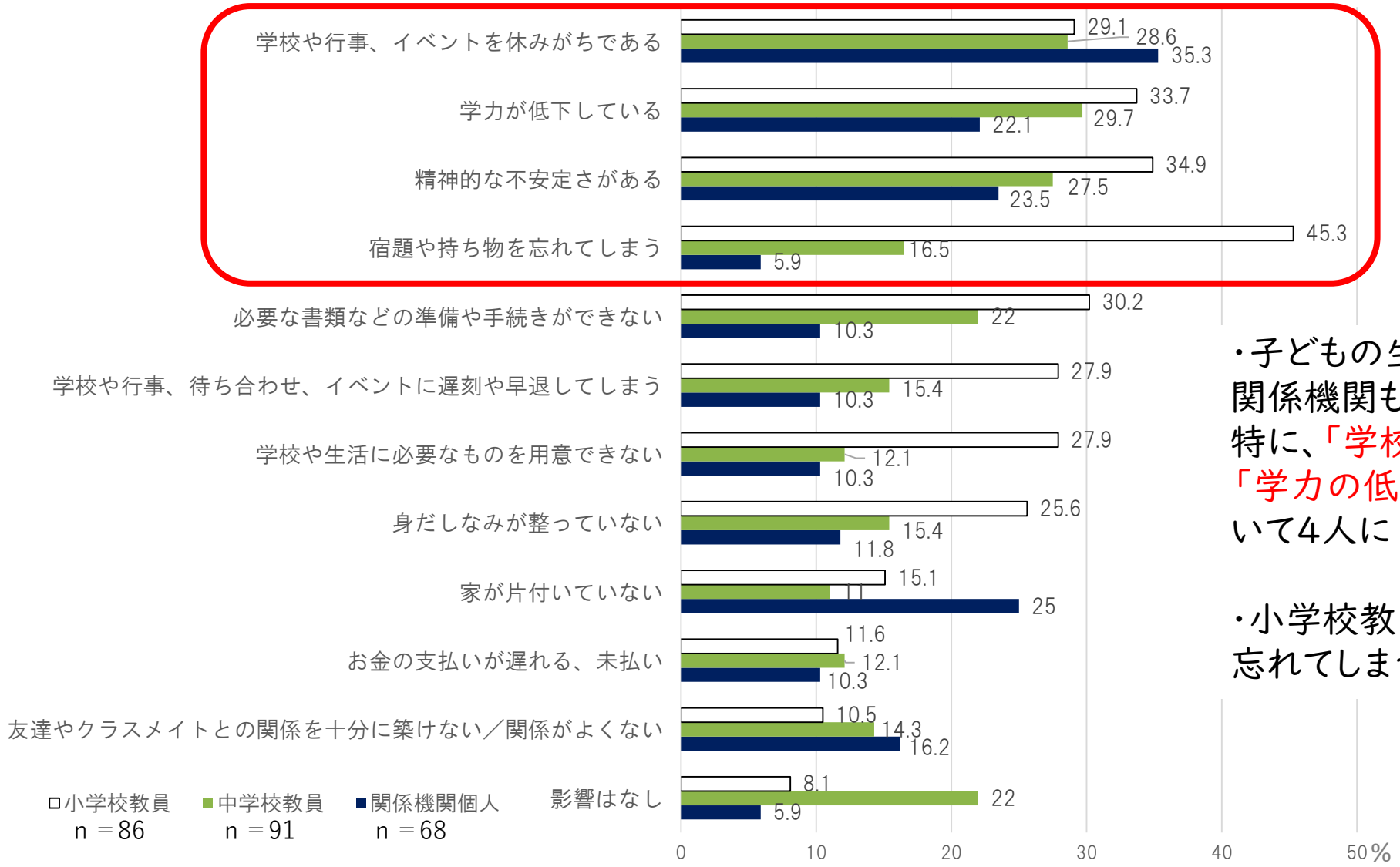
・ケアしている相手の状態としては、「きょうだい」は「幼い」「知的障害」という回答があり、「母親」は「精神疾患※疑い含む」「要介護」「日本語が苦手」「身体障害」「依存症」、「父親」は「日本語が苦手」「要介護」という回答があった。

・ケアをしていると気づいたきっかけは、教員は「児童生徒の話から」が約6割となっており、関係機関個人は「学校および他の関係機関から」が約4割となっている。

・ケアの内容は、「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」「家族の代わりに、家事をしている」「感情面のサポート」という回答が多くあった。

2. ヤングケアラーについて

2-3. ヤングケアラーと思われる子どもの生活への影響



・子どもの生活への影響について、教員も関係機関も8割以上の人が感じている。特に、「学校や行事、イベントを休みがち」「学力の低下」「精神的な不安定さ」について4人に1人が捉えている。

・小学校教員の半数が「宿題や持ち物を忘れてしまう」と感じている。

2. ヤングケアラーについて

2-4. ヤングケアラーと思われる子どもへの対応と体制について

教員 小学校 86名 中学校 91名	欠席の増加や不登校などの傾向であったり、学力低下や遅刻などの学校生活への影響、睡眠不足や精神的な影響が見られる児童生徒に対して、教員は話を聞く、家庭訪問、SSWをはじめとする関係機関との連携を行っていた。
関係機関個人 68名	精神的な不安定さ、親子共にコミュニケーションの難しさ、ケアをすることが当たり前になっている状態の子どもに対して、サービス提供時や訪問の際に、会話を積極的に行ったり、日本語教師の派遣、見守り事業など具体的なサポートの提案や提供をしたり、関係機関との情報共有・会議を設ける対応を行っていた。

・対応をする際に、学校内や職場内で相談できる人がいる人は7～8割であった。
・子どもとどのように接していくのか、言葉や文化の違い、親とのコミュニケーション、多機関との連携に課題を感じている人がいることがわかった。
・連携先としては、子育て世代包括支援センター「みらい」、子ども家庭支援センター「たっち」が最も多かった。
・教員は、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、民生児童委員などの関係機関が多く、関係機関個人は、学校、スクールソーシャルワーカー、訪問看護事業所が多い傾向にあった。

1. 考察　子どもたちが安心して過ごせる環境づくりに向けて

児童生徒調査、教員調査、関係機関調査を踏まえて、以下の3点について整理し、今後の方針について述べる。

①ヤングケアラーの周知・理解の必要性	・ヤングケアラーは多様な状況にあり、負担を感じている子どももいれば、役割意識をもって前向きに取り組んでいる子どももいる。また、外からは見えにくく、自覚もしにくい特徴がある。 ・家族のケアで悩みを抱え、時間や機会の制限されることなく、子どもらしく過ごせるように、ヤングケアラーの周知と正しい理解が必要となる。
②状況把握と必要な支援の提供	・ケアをしている子どもの存在に気づき、悩みや困りごとに対して丁寧に話を聴くこと。 ・子どもと家族が安心感を得て、必要な支援を理解し、選択し、決定できること。 ・このような対応を可能にするためには、子どもにとって頼れる大人の存在、信頼関係の構築、わかりやすい情報提供、家族全体への具体的な支援の提示が求められる。
③支援体制基盤の強化	・既にある学校と福祉行政、関係機関とのネットワークをより強化していくことが求められる。 ・多様な分野の団体・機関の橋渡しを行う調整機能、情報共有、進行管理が必要となる。 ・複雑かつ複合的なニーズを持つ家庭を支える際に課題やジレンマが生じることもあるため、研修の機会などを通じて、学校や福祉行政、関係機関の対応力の向上と共通理解を深めていく必要がある。

2. まとめ

日本財団の助成を受けて、2023年4月より東京都府中市は自治体連携モデル事業を開始いたしました。また、初めてのヤングケアラー実態調査が行われました。家庭の中で日常的に家事や家族の世話をしている子どもは5.4%、何らかの影響が出ている子どもは1.7%おり、様々なケアの役割を担っていることがわかりました。

しかし、ヤングケアラーの概念は、周知や理解が十分にされていない現状にあります。児童生徒自身が、ヤングケアラーについて学ぶ機会があること。また、周囲の大人（教員や関係機関）が、家族全体を支える視点を持ち、子どもとその家族の悩みに寄り添って、配慮のある対応や具体的な支援をする際の共通認識・連携体制を整えていく必要があると考えます。

今回の実態調査を踏まえて、府中市では子どもたちが生活しやすいように、具体的な施策の検討をしていきます。最後に、ご協力いただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。